

森の原遺跡第3次発掘調査説明資料

公益財団法人山形県埋蔵文化財センター

平成24年9月11日

調査要項

遺跡名	森の原遺跡(県番号 NO.639)
所在地	山形県村山市大字土生田字道出
時代・種別	縄文時代・集落跡 平安時代・集落跡
起因事業	道路改良事業(交付金・地方道) 一般道大石田土生田線(仮称) 村山大石田インターチェンジ設置工事
調査依頼者	山形県村山総合支庁建設部北村山道路計画課
調査機関	公益財団法人山形県埋蔵文化財センター
現地調査	平成24年7月2日から9月14日まで
調査面積	2,000㎡
調査担当者	調査研究員 大場 正善(現場責任者) 調査員 岩崎 恒平
調査成果	(9月11日現在)
検出遺構	縄文時代:遺物集中部 平安時代:河川跡 中世あるいは中近世:杭列を伴う湿地跡、大型土坑(井戸跡か?)
出土遺物	縄文土器 石鏃 磨製石斧 剥片 須恵器 土師器 古銭 磁器



遺跡位置図(1/50,000)

1 調査の概要

遺跡の立地 森の原遺跡は、村山市北部の土生田字道出に所在します。遺跡から西約1.2km離れたところには、最上川が流れています。地形的に遺跡は、山形盆地の北端、最上川の三難所よりも下流に発達する氾濫原の中、すなわち最上川が増水した時に洪水が起こりやすいところに立地しています。

調査範囲 今回の調査は、平成22～23年度の調査区の東西に隣接し、インターチェンジを設置する2か所(1区、および2区)、約2,000㎡の調査となります。1区と2区の北側は、遺構や遺物の拡がり認められなかったことから、調査の対象としませんでした。

なお、隣接する平成22年度の1次調査は、本線部分に沿って走る取り付け道路部分、そして平成23年度の第2次調査は、高速道路本線部分となります。

2 発見された遺構と遺物

調査区の履歴 両調査区はごく最近まで畑地として使われていました。昭和50年代には、大規模ほ場整備事業などにより、調査区一帯が地表下約60cm程度の土が削り取られた上に、さらに盛り土された、大模な造成が行われました。そのため、造成によって盛られた土や、バックホーやブルドーザーのキャタピラの跡などが確認されました。

その造成によって盛られた土の下からは、近現代(明治～昭和初期)にかけて営まれていた水田跡が確認されました。調査区の地権者であった方や、調査区近隣のことをご存じの方のお話では、戦前くらいまで調査区一帯が水田であったということです。調査で確認された水田跡は、そのことを裏付けます。調査では、当時使われていた磁器のカケラが、いくつか見つかりました。

また、近現代の水田を造る際にも、もともとの地形の一部を削平していることがわかりました。

詳しく調査を行ったのは、この近現代の水田跡よりも下の地層に残された遺構・遺物となります。以下に、時代をさかのぼりながら説明します。

中世か中近世の杭列をともなう湿地跡 2区の北側では、黒色粘土(黒色の泥)が堆積した湿地跡が発見され、その湿地跡の縁にそって、径10cm前後の杭が約30cm間隔で打ち込まれている痕跡が確認されました。湿地の縁にそって設けられたこの柵列は、土留め、あるいは水の進入防止などの意味合いがあったと考えられますが、どのような機能を果たしていたのかについては、不明です。

湿地跡からは、11世紀後半の中国は北宋の時代に発行された「元祐通寶」という古銭が、1点発見されました。日本では、鎌倉時代から戦国時代にかけて流通していた貨幣です。湿地跡は、そのころのものであった可能性があります。

大きな土坑 2区の中央部では、幅約2m、深さ約1mほどの鍋底状を呈した大きな穴(土坑)が2基発見されました。調査区中央部東側の壁にかかっている土坑(SK1009)からは、底部付近で植物の種子が出土しましたが、それ以外の出土遺物はありませんでした。そのため、それらの遺構がいつのものであるのかは、わかりません。

可能性としては、寒河江市高瀬山遺跡で、似た形態をしている井戸跡があること、本遺跡で発見された土坑が、地下水が流れていることを示すグライ化した地層まで掘り込まれていることを考慮すれば、井戸として使われていたかもしれせん。

火山灰に覆われた河川跡 2区の北側、湿地跡の下に小規模な河川跡(SG1011)が発見されました。河川跡は、少なくとも時期の異なる2つの河川が重なっていました。新しい河川跡(SG1011)には、底部付近に915年に十和田湖から噴出した灰白色火山灰(To-a)と考えられる火山灰が確認されました。その火山灰層の直下から土師器片1点が、また同じ層順と考えられるところからも須恵器片が1点発見されました。

古い河川跡からは、木片や種子以外に何も発見されませんでした。灰白色火山灰が降灰するよりも前に、この地に最上川から発する小規模な河川が発達していたことがわかりました。

最上川の氾濫の痕跡 このほか、遺跡では、最上

川の氾濫によって押し流されてきた土砂(泥流)の堆積や地層の浸食(開析)、小規模な流路跡が、いくえにも重なっているのが確認されました。氾濫堆積物には、灰白色火山灰が崩れたブロック塊を含んでいるものもありました。

縄文時代晩期の遺物集中部 1区の南側では、黒色土層の中から、縄文時代の終わり頃(晩期)に位置づけられる土器片や破損した磨製石斧など、多数の遺物が狭い範囲で分布しているのが発見されました。しかし、黒色土層の南側は河川で、北側は氾濫による土石流で浸食されていました。遺物が集中している部分は、同じ個体と考えられる土器片が、密集、あるいは数cm程度の距離で分布していることから、幸運にも浸食による影響が少なかったことがわかりました。そのため、遺物が集中している場所の近くには、住居跡などの遺構があった可能性があります。

2区南側の石器資料の分布 2区の南側では、珪質頁岩製の石のカケラや石器の製作途上のもの、そして玉髓製の石鏃(完形品)が出土しました。出土した地層は、氾濫によって堆積したものであり、これらの石器は、氾濫によって押し流されてきた可能性があります。しかし、珪質頁岩製の石器資料は、色や質感から、同じ原石であった可能性があります。調査区近隣では、この石は産出していないので、遠くから運ばれてきたものと言えます。1区の南側の遺物集中部を考慮すれば、調査区より南側に遺構があった可能性があり、カケラや製作途上品に加工を加え、道具(石器)に仕上げるために、遠くから運ばれてきたものかもしれません。石鏃は、狩りに使うために持ち込まれた可能性が考えられます。詳しい時代は、縄文時代晩期のものである可能性があります。

3 まとめ

今回の調査では、昭和から中世、古代、縄文時代のヒトの営み、そして最上川の氾濫や十和田湖の噴火などの自然の営みの痕跡を確認することができました。今後、調査結果を詳細に検討し、地域の歴史解明の資料としていきます。



杭跡の断面



杭が打ち込まれた跡(赤い串の部分)



湿地跡から出土した「元祐通寶」



915年に十和田湖が噴火した際の火山灰をはさんだ平安時代の河川跡(SG1011)



発見された土坑(SK1008)



発見された土坑(SK1009)



縄文時代と考えられる石器を主とした遺物群



出土した石器



泥流に押し流された縄文時代晩期の遺物群



縄文時代晩期の土器片